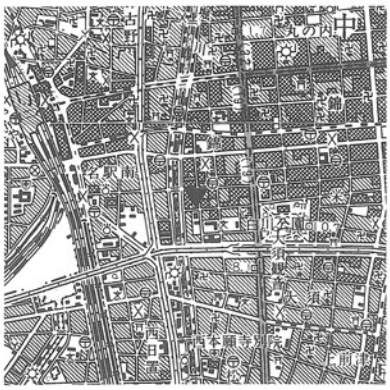
愛知・竪三蔵通遺跡（たてみつくらどおり）

1　所在地　愛知県名古屋市中区栄一丁目
2　調査期間　二〇〇五年（平17）四月～二〇〇六年三月
3　発掘機関　朝日航洋㈱
4　調査担当者　安田幸市・水野聡哉・田中城久
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　旧石器時代～江戸時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

竪三蔵通遺跡は、名古屋市の都心部に近い標高一〇m前後の台地上に位置する。これまでの発掘調査では、旧石器時代から弥生時代にかけての遺物や古墳の周溝、古墳時代から奈良時代にかけての住居などが検出された。また、江戸時代には名古屋城下町の武家地にあたり、屋敷地に伴う各種の遺構が多く検出されている。



（名古屋北部・名古屋南部）

木簡は、江戸時代の庭園遺構（池）の庭石の抜き取り痕とみられる土坑SK四六（長径二・四五m短径一・六七m）から一点、一九世紀前半頃の陶器を伴う廃棄土坑SK一六三七（南北三・一m東西三・九mの長方形）から二点、一九世紀前半頃の陶器を伴う井戸SE一〇（径一・二mの隅丸方形、深さ三・四四m）から二点、計五点が出土した。

8　木簡の釈文・内容

SK四六

(1)・「
下□□　積□
五□□□□
月□□□右ェ門」
・「
□□□□も
□□□箱
□□□人と
□□□□［月カ］
□□□」
193×76×5　011

SK一六三七

(2)
・「□　八枚　すゝき　三本
いかすすき壱本
いな　十三　」
・「御用
高□□様　川合定ェ門　」　155×43×4　011

(3)
「上
。夏目□（笠カ）十朗（郎カ）様　甚左衛門
□（拾カ）□□百□（五カ）□」　190×49×6　011

SE一〇

(4)
・「〈　此塚内岡田久八朗（郎カ）」
・「〈　□田村衛門　」　88×25×2　033

(5)
・「。矢取」
・「。矢取」　75×53×8　011

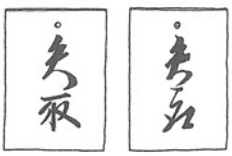
(1)は、二～三回重ね書きされていて判読が困難。(2)(3)(4)は、荷札であろう。(5)は表裏とも同じ文字が書かれている。

(1)

(2)

(3)

(4)



(5)

9　関係文献

豊田通商㈱『竪三蔵通遺跡―集合住宅建設工事に伴う発掘調査』（二〇〇六年）

（水野裕之〈名古屋市見晴台考古資料館〉）